

## 十勝川流域委員会（第13回） 議事要旨

- 日時：令和4年9月16日（金）10：00～12：00
- 場所：帯広第2地方合同庁舎 3階共用会議室1～3（WebexによるWEB開催併用）
- 出席者：泉委員長（WEB）、山田副委員長（WEB）、赤坂委員、新出委員、石原委員、志賀委員（WEB）、鈴木委員、根本委員（以上8名）  
※委員長、副委員長以降の順は五十音順

## ■議題

- （1）前回の流域委員会の意見について
- （2）十勝川水系河川整備計画の変更（素案）について

## ■議事要旨

## （1）前回の流域委員会の意見について

- ・人的被害を見ると、近年の洪水被害は過去の洪水に比べて抑えられており、どれだけ治水計画が重要かを表していると思う。治水計画をさらに進めていただきたい。  
ソフト対策を進める上でも、人的被害の情報を活用することが重要である。（委員）
- ・今回の目標流量は2℃上昇を見据えて算出しているが、4℃上昇のデータはどのように使うのか。4℃上昇を見据えた上で、段階的に（2℃上昇で）整備するというのを整備計画本文に記載してはどうか。（委員）  
→ハード整備は2℃上昇、リスク管理は4℃上昇を見据えて進めていくことを考えている。整備計画本文での記載方法を検討したい。（事務局）

## （2）十勝川水系河川整備計画の変更（素案）について

## 「1. 河川整備計画の目標に関する事項」

- ・基本理念はとても大切な部分である。色々な言葉が羅列されていて非常にわかりにくい。一般の方たちが分かりやすい文章となるように整理してほしい。（委員）  
→承知した。（事務局）
- ・グリーンインフラは、地域振興に役に立つものであり良いことではあるが、樹木などの緑については、防災、減災については効果が限定的であることを評価すべき。防災、減災については、いわゆるグリーンが重要なのではなく、空間（様々な外力に対して緩衝となる空間）の存在が重要。間違った見方をされないようにグリーンインフラの定義を記載すること。（委員）  
→貯留効果や浸透効果の視点も踏まえ、整備計画本文での記載方法を検討したい。（事務局）
- ・流域治水は、関係者との連携などが重要なため、分かりやすい解説を加えるのが理念を説明する上ではプラスになるのではないかと。（委員）  
→整備計画本文での記載方法については、表現として工夫できるものがあれば分

かりやすくしたい。(事務局)

- ・流域治水を進めるにあたり、その対策の評価はどのように考えているのか。また、効果的に進めるためには、関係者間の密な連絡、働きかけが必要であると考え。(委員)  
→評価技術の向上は重要と認識している。十勝川ではリスク評価を先進的に進めており、引き続き開発局として技術を磨いていきたい。(事務局)
- ・技術開発の目的、ビジョンを整備計画本文に記載することはできないか。また、記載が分散していて分かりづらい部分があるため、全般的に記載方法を工夫してはどうか。(委員)  
→整備計画本文の記載方法を検討したい。(事務局)
- ・1案から3案で掘削土がたくさん出るが、その活用方法についてはどう考えているか。(委員)  
→掘削土については、堤防盛土や農地への還元のほか、避難場所の盛土等、有効利用を図ることを検討している。(事務局)
- ・目標流量については、既往最大の平成28年8月洪水の流量、アンサンブルデータを用いて現行整備計画治水安全度を確保できる流量のうち、大きい方を設定することについて、異議はないか。(委員長)  
(「異議なし」)
- ・次に、この目標流量に対する整備内容について、事務局からは既存施設を有効利用する案を提案されている。  
新規遊水地は、住民の合意などがあり、非常に難しい面がある。河道掘削は、相当な量を掘削しなければならないが、ご意見をいただきたい。(委員長)
- ・既存ダムの有効活用はコスト的な面、効率的な面から一番現実的だろうと思う。(委員)
- ・既存ダムの有効活用にあたり、かさ上げなどの改修が必要なのか、ほとんど手をつけなくてよいのか、見通しがあれば教えていただきたい。(委員)  
→目標流量規模に対して、既存ダムを活用する場合は、何らかの施設改良が必要になると考えている。(事務局)
- ・既存ダムの有効活用によって貯水能力は高まると思うが、局所的な大雨が生じた場合は緊急放流を想定しているのか。(委員)  
→緊急放流を想定した検討を行っている。(事務局)
- ・ダムにおける利水と治水の折り合いは、非常に難しい議論である。降雨予測の技術も向上してきており、どちらにもメリットがあるような調整により、既存施設の有効活用を進めていただきたい。(委員)
- ・事前放流は、ダム管理という観点からすると非常に大きな第一歩を踏み出したと知っているが、実際には洪水ピークの前に容量を使い果たすこともあり、ゲートをどう使っていくかが大事である。関係者間の調整が必要だが、色々な可能性を秘めており、次のステージに向けて検討を進めていただきたい。(委員)  
→事前放流したうえで、洪水ピークを少しでもずらすことを検討するなど、ダム管理者とともにできる限りの対応を考えていきたい。(事務局)

- ・河道配分流量の見直し、流域治水への転換の推進、維持流量、河川環境の整備と保全に関する目標、生態系ネットワークの形成について、異議はないか。(委員長)  
(「異議なし」)

## 「2. 河川整備の実施に関する事項」

- ・21ページの二つ目の文章に「治山施設等の整備」とあるが、この表現は正しいのか。「砂防設備」の整備が正しいのではないか。(委員)  
→表現を検討する。(事務局)
- ・流木対策について、九州の豪雨災害など、最近では流木被害が多いため、山地も含めた流域での流木対策を進めていくなど、強い表現で記載してはどうか。(委員)  
→整備計画本文での記載方法を検討したい。(事務局)
- ・16ページに洪水の継続時間に関する内容が盛り込まれたことは、よいことだと思う。(委員)  
急流河川対策について、堤防の危険度だけでなく、背後地の人口・資産状況も考えて実施しているのか。(委員)  
→流速や高水敷と堤防の近さなどにより堤防の危険度を明らかにするとともに、背後地の重要性も考慮して進めているところ。(事務局)
- ・陸生生物についても、流域治水と同様に堤外だけでなく堤内の環境も考えて、環境保全を考えることが重要である。(委員)  
→本計画では、生態系ネットワークの取組として、堤内も含めた流域全体としての環境保全を考えている。(事務局)
- ・29ページの「地域と一体となった川づくり」には、現在、高校生など若い世代と連携した川づくりをしてきているので、その部分を記載してほしい。また、42ページの「危機管理体制の構築、強化」では、災害リスクの高い地域の町内会などへの積極的な働きかけ、情報提供について、整備計画本文に記載していただきたい。(委員)  
→整備計画本文での記載方法を検討したい。(事務局)
- ・21ページについて、41ページと同様に、マイタイムラインという自助だけではなく、コミュニティータイムラインについても記載したほうがよい。災害対応については、38ページの「自治体の支援」という項目には、避難訓練だけでなく、発災前、発災中、発災後を含め、災害対応訓練という大きな枠で考えていただいたほうがよい。また、災害情報は極めて重要であり、「確実に伝達するための体制づくり」について、メディアとの連携など、具体的に記載してはどうか。(委員)  
→メディアとの連携については、ケーブルテレビ・NHKとの協定によるCCTV画像の提供などを進めているところ。整備計画本文での記載方法を検討したい。(事務局)

<事務局より、欠席委員からの意見報告>

- ・ 雨水貯留施設などの流域治水対策の効果を河川整備へ反映できるようになると良いと思う。  
整備計画本文について細かなところまでよく書き込まれている。(委員)
- ・ 事務局から提案していただいた整備計画(素案)について異議はないか。(委員長)  
(「異議なし」)
- ・ 今日素案について検討していただいたが、今後の予定はどのようになるのか。  
(委員長)
- ・ 目標流量については、気候変動後についても現在の整備計画目標の安全度を下げない、平成28年の洪水に対応するという二つについてご確認をいただいた。治水対策案については、既存ダムの改良プラス河道掘削についてご了承をいただいた。次回は、より具体的な内容をご提示させていただきたい。(事務局)

以上